



「みんなで見ようガリレオの宇宙」

若松謙一，渡部潤一 著

1996年12月20日発行

岩波ジュニア新書，212ページ

定価650円（本体631円）

解説書

お薦め度

☆☆☆☆☆

最近、天文学の本を読む機会が多い。しかし関心のある人々のための本は多いが、中学高校生向けの啓蒙書は少ないようだ。この本はまさに初級の入門書と呼ぶにふさわしい。それも、ガリレオの観測を、著書「星界の報告」の内容に添って確かめつつ、中学高校生たちを天文学へ誘おうという、啓発的な解説書である。

人類史上初めて自分の望遠鏡で宇宙を見たガリレオ、彼が大感動をもって観測した宇宙を語るという、一味違う視点で書かれたところが、この本の魅力でもある。

読者層を、中学高校生と考えると、「判りやすく」ということで、内容の程度を下げる書き方をすることがある。しかし、本書は、専門用語など遠慮せず使いながら、妥協のない解説がなされている。そのため、多少の難しさを残した仕上がりとなっているようだが、読んでみて気持ちがいい。また、大人にも読みごたえがあり、学ぶことの多い本である。

私は、本書のねらいは二つあるように思う。一つは「未知の世界への探求の感動を伝える」。この点について、ガリレオの次の言葉が端的に物語っている。「最初に月を見たが、すぐ近く地球半径のほとんど二倍しか離れていないようだった。そのうち、法外な喜びあふれる心で、多くの恒星や遊星をたびたび観測した」（5ページ）と。ガリレオの発見と感動は、また著者たちの感動でもあろう。それをそのまま、若者に伝えたいという熱意が、行間に強く感じられる。

もう一つは「自分で直接体験したことこそ、本当の自分のもの」という信念を、若者に教えようとしている。「あとがき」に次のようにある。

「(前略)でもしよせん受け身での体験や観察であり、そのときはすばらしいと思っても、本当に自分のものとはなりにくく、その感動もすぐに消えてしまいがちです。直接見たりさわったりと、自分で体験することは、本当に自分のものとするために大切なことではないでしょうか」(209ページ)。

この点こそ、中学高校生が、書物に書かれた「他人の知識」の習得から脱却して、本当の自分のものを見つける鍵であろう。知識中心主義に侵された教育への警鐘と受け止めたい。

7名の生徒（中学1年から高校2年）に読んでもらい、感想を聞いた。皆一様に、「ガリレオは偉いと思う。なぜなら望遠鏡を、戦争のためでなく、天体観測つまり平和のために使ったから」ということであった。また、中学生は、「第2章が一番身近に感じた。なかでも月の観測のところが一番面白かった。これから月を見るとガリレオの観測を思い出すと思う」という。

「第3章の望遠鏡の原理と性能のところは難しかった」とは、全員が同じ感想である。やはり理科の授業で詳しくやっていないせいもあって、そのような感想になったのだろう。

念のため断っておくが、以下のことでこの本の価値が下がるものではない。スペースの関係もあるだろうが、やはり図をもっと入れるべきだと思う。星の生涯についての記述などは、図で示すとより判りやすかった。また本書の最後に、既存の科学的価値観のゆきづまりと、新しい価値観の台頭を期待するという点について、極めて重要な問題が、ほんの少ししか触れられていないのは、やや残念な気がした。

澁谷英紀（関西創価中学高等学校）